

「若さ」あふれる木を 大学という土壌で育てる



高知工科大学 工学部長

坂本 明雄 さかもと あきお

平成9年3月にそれまで21年間勤めた徳島大学工学部を退職し、翌4月から、高知県香美郡土佐山田町(現香美市)に開学した高知工科大学の教員になりました。

高知は父の故郷です。高知工業学校を卒業し大阪の電力会社に就職した父は、晩年、墓参りのたびにJR高知駅をカメリアにおさめていました。父にとつては出発の場としての思い出とともに、故郷へ帰ってきたことを肌で感じる建物であったのでしよう。眉山の姿を見て徳島へ帰ってきたことを実感するわけですが、父にとつては高知駅がそれに相当するものだったようです。

晩年を大阪で過ごしていた父は、私が高知へ行くことになったと聞いて、「時は自分も高知へ戻りたいと考えていたようです。結局、母から「若い木は環境が変わっても新しい土地で立派に根を張るだろうが、老木の場合はそんなに簡単ではないよ」と言われ、それからは高知のことは口に出さなくなりました」といっています。

大げさに言えば、父の帰郷の念を息子が果たし

たわけで、親子二代によるUターンといつことになりました。

さて、徳島大学から高知工科大学へと職場は変わりましたが、若者を大学へ受け入れ、育て、社会へ送り出すという大学の使命は同じです。大学教員になって30年、今更ながら学生の「若さ」をつくづく実感します。

「若さ」は、「新鮮さや元気」というポジティブな意味とともに「未熟さ」というネガティブな二面も合わせもっています。大学へ入学したばかりの学生は、両方の意味の「若さ」のたまりです。

「若さ」のもつポジティブな意味合いをさらに推し進めることは、徳島大学の教育理念の中にある「進取の気風に富む人材の育成を目指す」ということにつながるでしょう。

一方、ネガティブな意味での「若さ」も学生はもっています。しかし、これはポジティブな意味に変換することが可能であり、さらに言えば、未熟であるからこそ大きな可能性を秘めているのです。

そして、そのような変換の過程を助けることが大学教育の役割の一つであると考えます。

近年、学生の多様化傾向の進展を問題視し、それに対応できる教育改革が求められています。それぞれの大学で、それぞれの視点からこの問題を捉えて特色ある大学教育を実施しています。徳島大学における種々の取り組みは、本誌を通じてご存じのことと思います。

大学という新しい環境の地に植え替えられた若い木がそこに根を張って栄養を吸収し、さらに新天地へ旅立っていく。その手助けをすることが我々大学教員の使命であることを、今回の寄稿を機に母の言葉を思い起こしながら再認識いたしました。このような機会を与えていただきましたことに感謝して結びたいと思います。ありがとうございました。



略歴

- 1976年 徳島大学工学部助手
- 77年 徳島大学工学部講師
- 81年 徳島大学工学部助教授
- 90年 徳島大学工業短期大学教授
- 93年 徳島大学工学部教授
- 97年 高知工科大学工学部教授
- 2003年 高知工科大学工学部長

